

# くまさんだより

日本基督教団 豊橋東田教会

〒440-0055 愛知県豊橋市前畑町 112 ☎0532-54-3435

公式サイト <https://azumada.org/> 中島 善子牧師

2024年

9月号

9月12日発行

イラストは全て池谷陽子さんご提供

## 9月8日 主日礼拝

「私は必ずあなたと共にいる」中島 善子牧師  
出エジプト記 3章1～22節 旧約聖書96～98頁



エジプトで権力の座に着いたヨセフは、飢饉を避けるため、カナンにいた家族をエジプトに招いた。時が過ぎ、数を増すイスラエル人に、エジプト王は脅威に感じ、生まれたイスラエル人男子を殺すよう命じた(1:16)。乳飲み子のモーセも籠に入れられ、ナイル川に流されたが、エジプトの王女に拾われ、イスラエル人の子供と知りつつ、育てられ、王女の子供となった。その際、モーセの実母が、彼の乳母になっている。

成人したモーセは自分がヘブライ人(イスラエル人)と知っており、エジプト人が同胞を虐待しているのを見て、エジプト人を殺して埋めてしまう。これが発覚するとモーセはエジプトを離れ、ミディアンに逃れた(聖書地図1 紅海の右上)。そこでモーセは家族を持ち、平凡な羊飼いとして暮らしていた(2章までの内容)。

ある日、モーセが羊を追ってホレブ山に来ると(十戒を授かるシナイ山)燃える柴と炎の中に御使いを見た。しかも燃えているのに柴は燃え尽きない。不思議に思って近づくと、燃える柴の中から神が、モーセに呼びかけて言われた。

5節「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。私はあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。

聖書で火は「神が共にいる徴」。出エジプトでは、火の柱がイスラエルの民を守り、ユダヤ教の祭壇には、絶えず火があった。そして今、山奥なのに、燃える炎と共に神がおられて、そこを聖なる場としていた。しかも神はモーセの名前を知っていた。否、彼の祖先の名前も知っており、ご自分を「イスラエルの神だ」と告げた。当時、高齢の羊飼いだっただモーセは、エジプトで重労働に苦しむ同胞のことを

忘れていたのかもしれない。だけど神は、ご自分の民の苦しみを忘れない。それはなぜか。

神は虐げられた民の痛み苦しみを、ご自分の痛み苦しみにするからだ。と言うより人が痛み苦しむ時、真っ先に痛み苦しむのが神なのだ。そして神の時が来た。神が立ち上がる時が来た。神はエジプトで苦しむ民を救い出し、乳と蜜の流れる故郷カナンに導き上ることを約束し、エジプトからご自分の民を連れ出すために、モーセをファラオのもとに遣わすと、彼に告げた。

「寝耳に水」。エジプトの王宮にいたとは言え、エジプトから逃げ出して、何十年も山奥で羊飼いとして暮らしている。羊飼いのモーセが、どうやってファラオを説き伏せ、イスラエルの民をエジプトから連れ出すことができるのか。余りに無謀だ。だからモーセは言った。「私は一体、何者なのでしょう」と。モーセの寿命は120歳だが(申命記34章)、この時、彼は80歳で、無力な羊飼いに過ぎない(荒野の旅は40年間)。だから彼は正直に、「私は何者か」と、神に答えた。

神の召しに、そう答えたモーセは正直だ。しかしそれはまた神がモーセを選び、用いようとしておられるのに「私はこういう者」と、自分の判断に座り込み、動こうとしない頑なさでもある。また更に、神の言葉より、自分の体験や自分の判断に、固く信賴している彼の「思い上がり」でもある。しかし自分の弱さを自覚して、尻込みするモーセに、神は告げている。

12節「私は必ずあなたと共にいる。このことこそ、私があなたを遣わすしるしである。あなたが民を、エジプトから導き出した時、あなたはこの山で神に仕える」。

神は、年寄りの羊飼いモーセに、聖なる使命を与えた。荒野の山でも、神が共におられることで、

そこが「聖なる場」とされたように、神が共に  
おられることで、無力で、年老いた羊飼いが  
「神の御業に用いられる聖なる者、聖なる神  
の器」とされてしまうのだ。

考えると不思議だ。エジプトにいた時、モーセは  
青年で気力体力もあり、エジプト王女の養子という  
身分もあった。それなのに、そんな立派なモーセを  
使わないで、何の力もない80歳の年寄りモーセを、  
神はわざわざ使おうとする。なぜか。

神は、自信満々の者を、ご自分の器として  
用いない。自分の力に頼る者、自分の才能を  
誇る者を、神はご自分の器として用いない。  
神がその人の中に入って使うためには、その  
人は「空の器」でなくてはならないからだ。

神が人の中に入り、その人を使う時、人の  
誇りは邪魔な異物でしかない。だから打ち砕  
かれ、へりくだり、カラッポになった器こそ、  
神は用いる。神にとって最も使い勝手の良い  
「神のための器」にしてから、神はその人を用  
いる。

これは私達も同じ。若くて健康で、何でも出来て  
自信満々の時、神なんか要らない。何より自分が  
神だし、自分以外の神は認めない。だから神は、  
80歳のモーセ、75歳のアブラハムを用いた。また  
ユダヤ教徒の正義に燃えて、教会を迫害していた  
パウロに、神は復活のキリストを出合わせ、彼を打  
ちのめし、カラッポにしてから、彼を「ご自分の器、  
伝道の器」として、神は最後までパウロを用いた。

神は用いようとする器に乗り込み、器と共にいて、  
御業を行うのに必要なものを神が自ら器に満たす。  
私達がどう生きるべきで、何が必要か。それを知る  
のは、私達を造られた神。だから私達は今、神に  
招かれ、神の御前で「神の器として生きる」と、  
神に言われている。神の器に求められていること。  
それは、私達に乗り込む神に信頼して、自分の  
運転席を、自分自身を、神に明け渡すことだ。  
だから神がモーセに求めているのは、才能や強さ  
ではない。ただひたすら神に信頼して、カラッポの  
自分のまま、神に遣わされて、神に従って生きる。  
それだけだ。

12節「私はあなたと共にいる。これが私が  
あなたを遣わすしるしである」。

言い換えると、「神である私が、80歳の羊飼  
いのあなたを遣わす。どんな時でも私は必ず  
あなたと共にいる。あなたが働くのではない。  
私があなたと共にいて、あなたの中で私が働  
く。私はあなたを、神にとって使い勝手の良  
い『聖なる器』とする。私はいつもあなたと

共にいる。これが、神である私が、あなたを  
遣わした徴であり、私があなたを『聖なる器』  
として用いる確かな徴だ」。

年老いたモーセと神が共におられ、神の召しを  
果たす保証となられる。神が「動くガソリンスタンド」  
として、モーセが遣わされる所に神が共におられ、  
モーセを神で満たし、そのモーセを神が用いる。

モーセは「私は何者でしょう」(11節)と神に言った。  
答えは「神が共にいる者であり、自分の中で  
神が働く者、そして神が遣わす者」。

また神は自らを、「私はある、私はあると言う者だ」  
と告げた(14節)。時が過ぎ、世は移り変わる。でも  
神は名の通り、決して過ぎ去らずに存在し続ける。  
時も世も神を消せない。時が移り変わっても、神は  
変わることなく、永遠に神であり続ける。この神が、  
人と共にいて、御心のままに人を召し、人を  
遣わす。

神の召しは救いの計画に基づき、即ち私達へ  
の愛に基づき、いつの世も揺らがず、変わらない。  
厄介な罪人＝私達を愛し抜いて、救うために  
こそ、神は人を召して、人を遣わす。そして  
神は、遣わされた人と共におられ、共に働く。

そして遣わされた人と共におられる神。それ  
はキリスト。キリストは、インマヌエル(神、  
我らと共にいます)の方だから。神に召され、  
遣わされた人の只中に、キリストが共にいて  
くださる。そして共に働いてくださる。

私達は若くも強くない。でも80歳のモーセと共  
に神がおられたように、私達と共にキリストがおられ  
る。私達を愛するからこそ、十字架で死に、死から  
復活されたキリストが弱い私達と共にいて、私達  
の中で神の業を行う。キリストが私達をとらえて、神の  
聖なる器として私達を世に遣わし、用いてくださる。

でも神の聖なる器として遣わされるのは私達だ  
けじゃない。すべての人が神に遣わされる。人が  
生まれて来たのは、命の中にキリストを受け、  
神の愛を現わす聖なる器として生きるためだ。  
それを、多くの人がまだ知らない。だからすべての  
人が神の愛を現わして生きていくようと、  
神はキリストと共に私達を、それぞれの場へ  
遣わしてくださる。さあ、ここから出かけよう。



聖書の言葉はすべて以下から引用しています。

聖書 新共同訳：

◎共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

◎日本聖書協会

Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988